



目次

[巻頭言](#) 実用英語教育学会会長 釣晴彦（札幌学院大学人文学部 教授）

[第9回研究大会報告](#)

[実践報告](#) 「大規模私立高校における取り組みと現状」 三澤康英（札幌龍谷学園高校）

報告 実用英語教育学会 竹内 典彦

[研究発表](#) 「インバウンドにおけるキャリア教育と外国人材への視点
～大学と社会の連結および人材イメージの再考～」

渡部 淳（北海道文教大学）

報告 実用英語教育学会 杉浦 理恵

[基調講演](#) 「増える外国人住民とともに生きる～北海道における多文化共生の現状と取組」

大高 紘希（公益財団法人 札幌国際プラザ）

報告 実用英語教育学会 石川 希美

[留学生セッション](#) 「北海道・札幌で暮らしていて困ったこと」

報告 実用英語教育学会 山崎 秀樹

[お知らせ](#)

実用英語教育学会 第9回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会第9回研究大会のテーマは、「2020年東京オリンピックと日本の英語教育 - これから地方でしたいこと・できること Part 2 -」です。大会を終え一言ご挨拶申し上げます。

実践報告は、札幌龍谷学園高校の三澤康英先生が「大規模私立高校における取り組みと現状」として報告してくれました。生徒を中心とした活動主体の指導を目指しており、様々なアプリを駆使してICTを上手に活用した授業作りを課題も含めて発表してくださり、教育現場の実践としては、大変参考になる報告でした。

研究発表は、北海道文教大学の渡部淳先生が「インバウンドにおけるキャリア教育と外国人材への視点～大学と社会の連結および人材イメージの再考～」として発表してくれました。昨年室蘭工業大学の小野真嗣先生が、「地方大学における留学生の人的リソース共有化」として詳しくデータに基づき発表をして頂いたことは記憶に鮮明に残っております。渡部先生は世界への見識を広め、留学生を英語圏だけではなく近隣の国特に中国語圏にもっと焦点をあて、体験を重視し、外国人の人材をグローバルな共存社会に組み入れて構築していく必要性を強調されました。渡部先生の個性が光る興味深い発表でした。

基調講演は公益財団法人札幌国際プラザ 企画事業部プロジェクト事業担当課の大高紡希さんが「増える外国人住民とともに生きる～北海道における多文化共生の現状と取組」として、講演をして頂きました。「永住者・定住者」としての外国人が、北海道では増えている状況を、貴重なデータを明示して説明してくれました。日本の社会の中で外国人はそれぞれの生活の場面で多様な「壁」に直面しますが、多文化共生を目指すためには、地域社会でできることは何であるのかを考えさせられました。実用英語教育学会もこの指摘された視点を今後研究テーマの中に入れて発展した活動に繋げていければと考えます。

留学生セッションとしては、「北海道・札幌で暮らしていて困ったこと」として、中国人の廖可さんとアメリカ人のレイチェル・バーソロミウさん、そして北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院大学院生の中井俊さんのコーディネートにより話が進められました。北海道胆振東部地震の際に経験したことや、医療や生活する上での重要な情報に関しての不足などが具体的に話されました。

今回の研究会は、新型コロナウイルスの感染騒ぎが浮上してきた中での大会でした。この大会の後、感染の状況が深刻になり、研究会の内容が現実の危機管理の情報と結びつき、大変有意義な研究会にもなりました。私事になりますが、この大会後の3日後に学生を引率してハワイへ行ったのですが、ハワイはまったく新型コロナウイルスに関しては対岸の火事でした。日本の情報を入手しながらの生活でしたが、日本に帰国する日に、ホノルルにクルーズ船のグランドプリンセス号が、あまり報道もなく停泊して、全員下船して観光をしていました。この温度差はなんだろうと思っていましたが、後から1人発病しハワイも今は非常事態宣言が出される結果になりました。外国にいて危機管理の情報に温度差を直接体験する貴重な機会にもなりました。

2020年4月から小学校外国語活動が始まります。実用英語教育学会は、小、中、高、大で教壇に立つ会員が相互につながり、さまざまな領域と水準における英語教育の実践と研究を行い、実用英語の研究を理論と教育実践の両面から推進して、多くの人達と、情報や手法をシェアして共に学んで歩いていきたいと考えております。今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第9回研究大会報告

2020年2月15日(土)に北海道科学大学サテライトキャンパスにて第9回研究大会「2020年東京オリンピックと日本の英語教育 - これから地方でしたいこと・できること Part 2 -」を実施しました。参加者数は27名(会員10名、非会員12名)となり、大変盛会のうちに終了することができました。ご発表頂いた皆様、貴重なお話をありがとうございました。

実践報告

発表者： 三澤^{やすひで}康英氏(札幌龍谷学園高校)

発表題： 「大規模私立高校における取り組みと現状」

概要： 昨年、大学入試改革の目玉であった外部検定試験導入が中止となった。折角高まっていた4技能の重要性の流れが元の本阿弥となってしまうのではないかという不安がある。勤務校では3年前からICT化の波に乗り、生徒全員がタブレット端末を持っている。これにより様々な授業で変化が起こっている。当日はそうした変化、取り組みについて報告させて頂く。(以上当日プログラムより)

指導の根幹は4技能である。今日はスピーキングの帯活動を中心に話したい。2年前からコミュニケーション中心の指導方法をすべきと英語科教員の間で提案したが、文法訳読式の教員から反対を受けた。しかし英語嫌いは50パーセントを超えている。多くの生徒は英語を話せるようになりたいと思っている。やはり内発的動機づけが重要と思う。

英語民間試験導入が延期になり、それまで民間テストの受験準備や指導に大忙しだったのでたいへんがっかりした。だからと言って文法訳読式に戻るのはいやがり違。生徒を中心にして活動主体の指導をすべきと考えている。脱「トークアンドチョーク」だ。ただし1回の授業で4技能すべてを取り上げるのは難しい。理論的背景としてはCLILで、言語形式にも注目しつつ、内容重視である。脱「英文解釈オンリー」だ。上位コースでは日本語を極力使わない。評価はペーパーテストと平常点である。CEFRのB1あたりを意識している。

ICTを活用している。札幌市の小中学校でタブレット端末が貸与されることが決定した。本学では2年前からタブレット端末を持たせていたが、新奇性は失われるだろう。しかし教員が面白いと思うのが原点だと思うし、それなくして指導の改善は望めない。4技能の指導と評価を変えていきたい。「1分間トーク」とい



う実践では、1分間で上位クラスで60～80語、それ以外では40～60語を話すことが目標だ。「ロイロノート」というアプリを使っている。動画を生徒が自ら撮ってアプリに上げていく。Picture descriptionも同様だ。非常に使いやすいアプリである。プレゼンテーションで「学校紹介」をやってもらった。優秀な生徒は1回の授業時間でスライドを作ってそれを覚えることができる。Retellingについては、ロイロノートで作りそれを発表する。リーディングについては、じゃれマガ(名古屋女子大のジャレル先生による100語程度の毎日



配信の教材)を使っている。ライティングは80語程度のダイアリーを提出させている。トピックはこちらで指定している。評価はたいへんだがくじけないようにしたい。話すことの抵抗感はなくなっている。ICTが助けになっている。これまで滝川西高校や旭川北高校を参考にしてきた。

今後の課題だがPDCAのチェック機能がきちんとできていない。模試などでの大きな伸びはない。準2級が50パーセントであり2級は少ない。家庭学習は90パーセントがゼロである。ICTの弊害もある。黒板や友達のノートを写真に撮って満足している。今後は千歳高校のように地域の人々に関わらせたい。また、Classiというベネッセのアプリで、イングリッシュセントラルの動画や、ライティングではGrammarlyを使用したい。(文責:竹内)

研究発表

発表者: ^{わたなべ}渡部 ^{まこと}淳氏 (北海道文教大学)

発表題: 「インバウンドにおけるキャリア教育と外国人材への視点
～大学と社会の連結および人材イメージの再考～」

概要: インバウンドを伴うイベントへの学生の参加は、外国語学習だけでなく世界への見識を広め、自らのキャリアを考え始める良い機会である。中国語圏がメインの北海道観光では、中国(語)人材の活用が重要である。(以上当日プログラムより)

国際的に通じることばとして英語が重視されているが、グローバル人材を育てるためには、英語のみにこだわり、All English や Only English になってはいけぬ。英語はもちろん大切だが、他の外国語、特に北海道では中国語が重要な役割を担っており、学生のキャリア形成にも関わってくる。

外国語学習においては、単に言語を学ぶということに留まらず、フィールドワークを通して広い視野を学生に身につけさせるべきである。例えば、国際的なイベントにボランティアとして参加し、そこで外国語を使うことで、新たな気づきを得ることが可能である。以前、洞爺湖で開催されたサミットにボランティアとして学生を参加させたことがあるが、その経験の影響からか、国際的に活躍している卒業生がいる。今年オリンピックが開催されるが、ボランティアをすることで、外国語を使って何かできたという自信がつかろう。

また、外国語学習は、言語だけでなく他の人文社会科学の専門分野の内容と関連させ、キャリア形成の一環として位置づけるべきだ。例えば、将来、青年海外協力隊への参加を希望する学生であれば、専門の話を聞いたり、ボランティアに参加したりして知識を得ていく。そのような中で、「学術知」から、「体験知」、そして「現場知」、「専門知」という様々な知識を得ながら、語学も身につけ成長することが可能となり、学生のキャリア形成に役立てることができる。

これからの社会では、留学生を「お客さん」としてではなく、学校や職場で活躍する中核的な人材として捉えるべきである。留学生は、超身近なグローバル人材である。彼らは教室環境の多様性を可能にしてくれる大切な存在である。異質な考え方や価値観を持つ留学生との多様性のある空間をともにすることで学ぶことが多い。また、職場においてもクリエイティブな仕事で活躍すべき存在である。中国からの留学生で卒業後も日本にとどまり、観光関連のビジネスで大成功している者もいる。北海道という、地理的にも恵まれた場所で、海外からの人材を活用していくことが大切である。(文責:杉浦)

基調講演

講師： 大高紡希（公益財団法人 札幌国際プラザ）

テーマ： 増える外国人住民とともに生きる～北海道における多文化共生の現状と取組

概要：

I. 多文化共生とは 日本で暮らす外国人の抱える課題

日本国内で外国人登録者数は増加の一途をたどっていますが、北海道で暮らす外国人数も 37,906 人（2019 年 6 月）に上り、2012 年の約 22,000 人に比べて大幅に増加しています。在留資格別では技能実習生が約 12,000 人で、同じく 2012 年に 4,000 人あまりだったことと比べると顕著な増加を示しています。札幌市についても、2019 年 10 月現在外国人数は 14,632 人、市民の 0.74%を占め、2010 年～2016 年ころまで 0.5%で推移していたことと比べると、近年特に増加していることがわかるかと思えます。また、外国人の国・地域は多いほうから中国（4,588）、韓国・朝鮮（2,776）、ベトナム（1,204）、アメリカ合衆国（593）、台湾（547）です。特にベトナム人居住者はここ数年大きく数を伸ばしています。（2015 年までの 4,5 位はフィリピン、ロシアでしたが、人数としては横ばいです）札幌では外国人居住者は伸びているとはいえ 1%を下回っていますが、道内の外国人居住者割合の多い自治体においては、外国人割合が住民人口の 10%から 20%以上を占めるところも出てきています。（表 1）



表 1

北海道の外国人割合上位の自治体			
自治体名	総人口 (人)	外国人 (人)	人口における 割合 (%)
占冠	1,508	393	26.06
赤井川	1,262	159	12.60
留寿都	2,047	252	12.31
倶知安	16,642	1,977	11.88
二セコ	5,298	500	9.44
東川	8,382	380	4.53
猿払	2,745	121	4.41
雄武	4,422	176	3.98

※北海道 住民基本台帳人口世帯数統計より

II. 多文化共生モデル

多文化共生をめぐる考え方について、ここでは違いのある人がある地域社会で暮らしていく時に受ける対応を例にとると 4 つのポジションに分類することができます。（図 1）

① 同化：違いのある人たちが変化すれば、地域社会は受け入れる＝変化しないなら受け入れない

- ② 排斥：違いがある人は変化しないし、地域社会には受け入れない
 - ③ すみわけ：地域に受け入れはするが、違いがある人たちは変化しない
 - ④ 共生：違いのある人たちが変化しながら、地域社会に受け入れる
- 多文化共生は④「共生」の状態を指します。

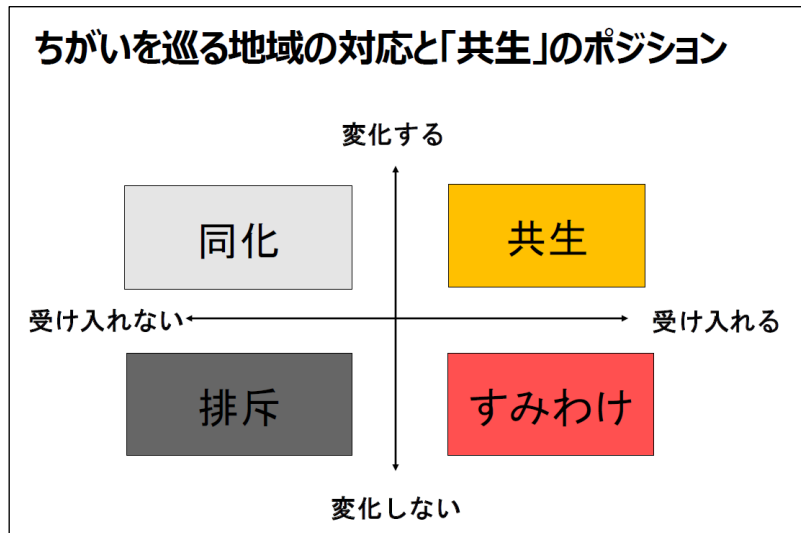


図 1

また、日本に住む外国人が抱える壁が 4 点挙げられています。

- ① ことばの壁：日本語しか書いていないので読めない。コミュニケーションが取れない
- ② 制度の壁：社会制度（保育所の入所手続き、戸籍）やイベント（学校行事）がわからない
- ③ こころの壁：無視、偏見、排除
- ④ 文化の壁：宗教の違いなど

「多文化共生」は札幌国際プラザの事業内容の一つですが、この 4 つの壁をなくすために様々な取り組みを行っています。特に、外国にルーツを持つ子どもの教育については、外国人集住都市である静岡県浜松市の「外国人の子ども不就学ゼロ作戦事業」がよく知られています。（浜松市の外国人割合は市民の 3%ほど）

III.災害時の外国人支援

外国人が被災した際には、外国人がもつ「災害知識の濃淡」により 4 つの壁にさらに「経験の壁」が加わります。（表 2）

地震のない国・地域からきている人たちにとってみれば、地震そのものがわからない、地震の影響で起こった停電の理由がわからなかったりします。札幌国際プラザは、大きな災害が起こった時には札幌市との協定に基づき、「災害多言語支援センター」になります。「災害多言語支援センター」とは、災害が発生した際に、外国人被災者のニーズに対して多言語による災害情報の発信や避難所巡回を行う、外国人の支援拠点となるところです。多言語化することについて、とりあえず英語があればいいのでは？やさしい日本語で情報を掲示すればいいのではないかと？ウェブや SNS で発信していればいいのでは？といった声が上がることがあります。しかし、多言語に翻訳することにより、外国人自身が地域社会に受け入れられていると感じたり、地域社会に外国人住民が共に暮らしていることを周知するための効果は発揮されないことから、災害時は双

方向の丁寧なコミュニケーションが欠かせません。

表 2

外国人被災者 5つの壁	
ことばの壁	ニュースがわからない、緊急速報メールが読めない。 災害のときにしか出てこない日本語。 外国人だから必要な情報をとりのがしているのではないかという不安
制度の壁	避難所はどこ？なにができるの？どんなときに行けばいいの？ 「避難指示」「避難準備情報」「避難勧告」
こころの壁	外国人が避難所にいる抵抗感 外国人だからマナーが悪い、などの偏見
文化の壁	「ご自由にお取りください」とは？ ハラール？土葬or火葬？
経験の壁	大地震のあと何が起きるの？（なぜ停電しているのかわからない） 現金が使えなくて困った。

IV.北海道胆振東部地震 災害多言語支援センターの活動

2018年9月6日に起きた北海道胆振東部地震の際は、災害多言語支援センターとして活動する機会となりました。9月初旬という高等教育機関が夏休み時期で留学生がちょうど入れ替わり時期だったこと、そして早朝3時過ぎの地震だったことから、外国人支援は観光客が中心となりました。通常在住者の対応では、災害復興のための支援も必要になるのですが、今回は発生時期・時間により、対応が観光客中心となったとても稀有な例だったといえます。札幌市では、これまで観光客に特化して対応する避難所の設置は想定されていませんでしたが、停電のためホテルなどの宿泊先を追われた観光客が街中にあふれ、急遽観光客を収容する避難所を開設しました。(図2, 3)

北海道胆振東部地震における 災害多言語支援センター活動概要

- (1) 設置主体 札幌国際プラザ
- (2) 設置場所 札幌国際プラザ内および札幌市役所9階会議室
- (3) 設置期間 9月6日(木) 4:00設置(情報配信は3:56開始)
9月21日(金) 17:45閉鎖
活動期間 延べ13日間 ※15~17日は閉館
- (4) 活動内容
 - ・電話・メール・窓口での相談対応
 - ・避難場所巡回
 - ・SNSやホームページを利用した情報配信

図 2

＜災害多言語支援センターの活動まとめ＞

【相談対応（31件）】

- ・電話 … 16件
- ・メール … 6件
- ・Facebook … 3件
- ・相談窓口 … 3件
- ・対人対応 … 2件
- ・その他 … 1件

【対応言語】

日本語、英語、中国語、韓国語
※ロシア語、ドイツ語、フランス語対応の職員がいたが、対応実績なし。

【巡回班対応】（18か所、27回）

【主な対応内容】

- ・泊まれる場所、避難所の問い合わせ
- ・空路の再開状況の問い合わせ
- ・千歳空港へのアクセス
- ・道内移動等の交通状況の問い合わせ
- ・被災状況の問い合わせ
- ・避難所閉鎖による誘導案内

【情報配信（31件）】

- ・HP … 13件
- ・Facebook … 16件
- ・メルマガ … 2件

図3

V.多文化共生、北海道のこれから

2019年4月入管法が改正され、新たな在留資格「特定技能」が創設されました。在留資格の更新が何度でも可能で、一部家族帯同も可能となり、実質的には単純労働が可能な移民の受け入れに舵を切ったといえるでしょう。これからはこれまで以上に「永住者・定住者」としての外国人が増えてくると思われます。また旅行者と生活者の区別がつかなくなってきました。そうすると日本人と同じように多様で複雑な問題を抱える可能性があり、それぞれの場面で「壁」に直面すると考えられます。

多文化共生社会のために地域社会でできることは何でしょうか？まずは、外国人を感じる壁を日本人だけで考えていてもわかりません。外国人に担い手になってもらい、ともにまちづくりに参加してもらうことが重要です。地域の魅力を発見して、活躍できる機会があると発信することにつながりますし、異なる視点から刺激を受けて、地域文化の成長機会にもなるでしょう。また、多文化共生は、外国人住民支援だけに限ったことではなく、地域の未来を創っていくことにほかなりません。多文化共生の必要性を伝えていくことも重要だと考えます。（文責：石川）

留学生セッション 「北海道・札幌で暮らして困ったこと」

札幌国際プラザ大高紡希氏の基調講演「増える外国人住民とともに生きる～北海道の多文化共生の現状と取組」に呼応し、「留学生セッション」として、北海道在位の海外出身者に「北海道で暮らして困ったこと」について語っていただいた。北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 大学院生 中井俊さんのコーディネートにより、同大学院生の廖可（中国出身）さんと、北広島西高校の英語指導実習助手 レイチェル・バーソロミウ（アメリカ出身）さんから、3点について外国人在住者の目線から体験をお話しいただいた。1つ目の「日本に住んで困ったこと」では、廖可さんは、区役所の諸手続き、レイチェルさんは病院のかかり方、バス利用、買い物など、日常的なことの仕組みがわからず、英語ができる人の通訳に依存せざるを得ないなど、文化・言語の壁による不便や、日本人と友人になりたくても、日本語ができることがその輪に入る条件になっていて難しいこと、を挙げた。2つ目の「北海道胆振東部地震の際に感じたこと」では、廖可



さんは医療情報不足やボランティアが活かされていないことが、レイチェルさんは日本に赴任直後で、地震災害や避難所の正確な情報を英語で得るのが難しかったことを挙げ、ユニバーサルデザインの表示や、公的な機関が多言語による情報発信をする必要を挙げた。これについては、大高氏による同プラザの多言語支援センターの紹介や、参加者からも東徳洲会病院による外国人患者の多言語対応などの情報提供があった。3つ目の「今後の課題点」では、廖可さんは、札幌は外国人に優しく良い環境を提供しているとしつつも、例えばハラフードやヴィーガン等、宗教、食生活の多様化による多様な食のニーズへの対応、レイチェルさんからは、障がい者がアクセスできるバリアフリー設備や、食品のアレルギー情報の多言語対応や表記の工夫等、地域で増える言語・文化の多様性に対応できる行政の取組の充実を求めた。(文責：山崎)

お知らせ

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は 4,000 円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。

会費振込先：

実用英語教育学会

ゆうちょ銀行 記号 19060 番号 10312621

もしくは以下の p.4 を参照してください。

http://spelt.main.jp/documents/spelt_bylaws_2019.pdf

2020 年 4 月 1 日より、ゆうちょ銀行の口座間送金に手数料（1 件につき 100 円）がかかります。今回、3 月にご送金いただいた年会費は 2020 年度分としてお引き受けいたします。2020 年度分の会費納入に限りの措置になるかと思いますが、これまで会員であった方・新会員の方も合わせてご利用ください。

参考：一部サービス料金の値上げについて

https://www.jp-bank.japanpost.jp/news/2019/news_id001432.html

なお、領収書が必要な場合には、4 月以降に発行いたしますので、事務局 (info@spelt.main.jp) までお知らせください。

◆研究大会について

2020 年 7 月 4 日 (土) に研究会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。研究大会のテーマは後日お知らせいたします。合わせて、発表者を募集します。

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を考察する「実践論文」の2部構成となっております。申込受付は8月末日（原稿締切は10月末）ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

編集後記

2月の研究大会は、英語教育という枠組みに留まらず、外国語教育とグローバル人材の育成、生徒や学生のキャリア教育との関連について、考える良い機会となりました。研究大会に参加して良かった! というコメントをアンケートで頂き、運営に携わる側として、とてもうれしく思いました。この学会だからこそできることを、今後も皆さんと一緒に考え、実践していければと思っています。(文責：杉浦)

例年より降雪量が少ないとはいえ、寒い中、実用英語教育学会の第9回研究大会にご参加くださいました全ての方々に御礼申し上げます。この学会は小学校から大学まで英語に関わっておられる先生方のみならず、英語以外の外国語の先生方や他分野の先生方、教育機関以外の方々や留学生や大学院生など、さまざまな方が集って意見交換をする興味深い場だと思えます。今後も皆様の声を研究会のテーマに反映して参りますので、ぜひご意見、ご感想をお寄せください。(文責：三浦)

実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（三浦、竹内、石川、杉浦）

発行：2020年3月31日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1651 (代表) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp